



故郷の歴史を継ぐことが使命

限られた時間。次代へ引き継

度重なる台風被害を受け、このまま農家を続けるか迷っていた頃、畑の土が流れないように畔に植えていた、畦畔茶に目が止まります。台風被害も受けず、力強く新緑の芽をふいでいました。「夫と

これだと思いました。その翌年、ヤブキタの改良品種の苗を分けてもらい、4人で30坪の畑に植え付けの始まりだった」と振り返ります。営農指導員に技術を教わり、昭和32年に盤山茶業振興会を結成。36年には初めての茶摘みが行われました。その翌年、全国茶共進会で二等を受賞するなど高い評価を得て品質の良さを

を実感します。その後、茶工場や病害虫の防除施設、電力供給など茶産地としての環境を整備。さらに、「全国家の光大会」で県代表として芳子さんが取り組みを発表し、全国1位となる農林大臣賞を受賞しました。「盤山は標高が高く、香り高い良質なお茶の栽培に適しています。集落全員の協働、団結のおかげで受賞できたと感謝しています」。

亡き母との約束を守るために――

「当時はとにかく食べることに必死でした。伐採した切株のあいだを山楯で耕して野菜を植えていきます。ホウレンソウの種をまき、初めて収穫したときは、畑にしゃがみこんで泣いたことを思い出します。母にも食べさせてあげたかった」と、

涙を浮かべ当時の心境を話します。雨が降ると集落の共同作業ができなため、2kmほど離れた営林署の山へ苗木を植えるべく、小学校に通う妹と弟を持たせる弁当を作るため、地元の家を回って食べ物を恵んでもらいました。「田代の人たちは本当に感謝しています。でも、自分に親代わりができていくか毎日不安でした。苦しくても、何もなくても人に笑われないよう育てなければ。それが母との約束だったから――」。

今ある「平和」は先人からの贈り物

今年、戦後75年という節目を迎えた日本。太平洋戦争だけでも、3百万人を超える犠牲者を出したと言われています。「もう」ではなく「たった」75年前に起きた事実を忘れてはいけません。あれから日本は、戦争と無縁の平和を享受し、奇跡とも言える発展を遂げました。しかし、当時の体験を語る人は年々減っています。戦争を知らない世代にとって、「あたりまえ」となっている平和。しかし、私たち一人ひとりが無関心のままでは、この平和を守ることはできません。歴史に目を



命と平和の重みを子どもたちに伝えている

写真提供：田代小学校

「戦争で多くの命が奪われました。私たちはその犠牲の上に生きています。あの時代を忘れることなく、永遠の平和が続くことを願っています」と語った芳子さん。命と平和の重み、そして故郷を求めた開拓団の歴史を語り継ぐことが使命と語る芳子さんは4年前、与論からの満州開拓、田代盤山への入植の歴史を綴った「私の人生論」を執筆。小学生に向けて開拓団の歴史を生きた声で伝えるなど、自信の思いを繋いでいます。戦争を知らない世代が、その記憶を心に刻み、次代の平和の道しるべになることを願う。

Interview
先遣隊の炊事を担当した
有馬 芳子 さん（盤山自治会）

14歳で与論島から満州へ移住。敗戦により満州を追われ、第二の故郷を求めて田代盤山に先遣隊炊事班として入植。90歳。



盤山青年団 団歌

有馬 芳子 作詞
山田 實 作曲

ああ若人よ我等こそ
第二の与論築くため
骨も命もこの土地に
埋める覚悟で働けば
いつか花咲く明日が来る

盤山青年団の団歌から一部抜粋